

エドガアが再び話し出したので止める。

わたしは職工をも、わたし自身をも、何人をも辯護しはしない。

ワンクリン

いや、しなくてはなるまいて！検屍陪審官は利害関係の無い同情者のことだから、飛んだ意地の悪いことを云はないものでもない。吾々は吾々の立場を忘れてはいけない。

スカントルベリイ

（相變らず耳を掩ふたままで。）検屍陪審官！いや、いや、それはさういふ事件ではあるまい？

エドガア

もう卑怯は澤山だ。

ワンクリン

卑怯などとは不愉快な言葉ですよ、エドガア・アンソニーさん。若しかういふことが起つた時に吾々が急に職工の要求を容れたとすると、それは如何にも卑怯らしく見えるものですよ、吾々は注意しなくてはいけない！

ワイルダア

無論しなくてはいけない。吾々は風説以外には何等この出来事について知らないのですからね。最も適當な處置は、すべての事をハアネスに委して解決させるのですな。それが自然です、どの道さういふことになる外はないのでせうから。

スカントルベリイ

（嚴めしげに。）全くです！（エドガアに向つて。）それから又あなたに對してはですな、わたしは、その、——あなたがこのすべての事件を取扱はれた態度に對する不快を充分に現はすことが出来ないのです。あなたは取消して然るべきです！餓死だの、卑怯だのと！吾々の意見を考へて見られるがいい！あなたのお父さんは別として——吾々は皆、吾々の取るべき唯一の方針は——善意のものであることに同意してゐる——あなたのお言葉は最も不規則です最も不適當です、でわたしはこれだけのことを申上げる、それは——それはわたしに苦痛を與へ——

（彼は彼の手を心臓の上に置く。）

エドガア

（剛情に。）わたしは決して取消しません。

（彼が猶も言葉を續けやうとするを、スカントルベリイは再び彼の耳を掩ふ。テンチが不意に議事録で仕事

をする。異常なことをしてゐたさいふことにすべての人々が気付いて、一人一人席に復する。エドガアのみは立たままでゐる。

ワイルダア

(何物かを拭き取らうとするやうな風で。) わたしは小アンソニー氏の言葉は少しも氣に掛けないので。検屍陪審官！それは非常識極まる考だ。わたしは——わたしは社長の動議に對して次の如き修正案を提出します、即ちこの爭議をシモン・ハアネス氏が今朝指示せる提案により、その解決を彼の手に一任すること。賛成の方はありませんか？

(テンチ議事録に記載する。)

ワンクリン

わたしは賛成です。

ワイルダア

それで結構です、わたしは社長にそれを重役會議にかけられんことを請求します。

アンソニー

(深い吐息と共に——ゆるやかに。) 吾々は攻撃的になつてゐる。(皮肉な海蔵をもつてワイルダアミス

カントルペリイミを見廻しながら。) わしはその責任を負ひます。わしは當年七十六歳だ。わしは今から三十二年前にこの會社が創立された時から社長をしてゐる。わしは景氣の好い時も悪い時も、會社の爲に盡して來た。わしと會社との關係は、この若者が生れた年に始つたのだ。

(エドガア辭儀をする。アンソニーは椅子を掴みながら、言葉を續ける。)

わしはもう五十年から「職工」を對手にして來た、わしは常に彼等に對抗して來た、わしはいままでに唯の一度も負けたことはない。わしはこの會社の職工とは四度闘つた、そして四度共彼等を打ち負かした。わしはもう以前のわしでは無いと云はれたやうだ。(彼はワイルダアを見る) それはさうかも知れんが、わしはまだ自分の武器を手にするだけの力には事を缺がらん。

(彼の聲は段々強くなる。重役連はそれぞれ違つた仕草で、彼の言葉から驚むる影響を現はす。)

職工は公正な取扱ひを受けてゐる、彼等は立派な賃銀を與へられてゐる、吾々は何時も彼等の不平を聞いてやつてゐる、時代が變つたといふものがある、若しさうだとすると、わしはそれと一緒に變らなかつたのだ、又變らうとも思はない。主人も職工も平等だといふものがある。馬鹿な！一軒の家には主人は一人しかない譯だ！二人の間が出會へば、優れた者が他を支配するのだ。「資本」と「勞働」とは利害を一にすといふものがある。馬鹿な！その二つの利害は、極と極とのやうに遠く相

離れてゐるものだ。重役は機械の一部だといふものがある。馬鹿な！吾々が機械なのだ、その頭脳であり筋肉であるのだ、何を爲すべきかを決定し指導し、且つそれを他人の思惑を憚らずしてするのは吾々の爲である。職工を恐れる！株主を恐れる！吾々自らの影に恐れる！そんなものになる位なら、わしは死んだ方がまだだ。

(彼は言葉を断る、そして彼の息子と眼を見合はせて、更に續ける。)

『職工』を扱ふ方法は唯一つしかない——それは鐵腕をもつてすることだ。現代の不徹底な仕事、不徹底な方針が、吾々をこんな目に會はしたのだ。感情と柔和と、この若者が彼の社會政策と呼ぶ處のものだ。諸君は食つてしまつた菓子を蓄えてゐることは出来ぬ！この中流階級の感情若くは社會主義、其他そんなものは皆愚にも付かぬものだ。主人は主人だ、職工は職工だ！一つの要求を容れたら、彼等はそれを六倍するのだ。彼等は(彼は悲痛な微笑を洩らす)もつともつとと要求するオリヴァ・ツ井ストの如きものだ。若しわしが彼等の立場をつたら、わしも屹度同じに違ひない。が、わしは彼等の立場にゐない。わしは斷言して置くが、何時か、諸君が此處で讓歩し彼處で讓歩してゐる内に——諸君は足元の大地を離れて、破産の沼に深く落ち込んでゐるのを發見するに違ひない。そして諸君と共に、諸君が讓歩した處の者共が同じ沼に藻掻いてゐるのを發見するに違ひない。わ

しは自分の自尊心のみを考へて壓制的暴君だと云つて攻撃せられた——わしは混亂の暗い流によつて脅かされ、俗衆政府によつて脅かされ、其他わしの眼に見えないものによつて脅かされてゐる此國の將來について考へてゐるのだ。若しわしの何等かの行爲によつて、これを吾々に齎らす助けをするならば、わしは世間の人々に顔向けが出来ないに違ひない。

(アンソニーが空を見詰める、彼の見るこゝの出来ないものを。一座は沈まり返へる。フロストが安關の方から這入つて来る、アンソニー以外の人々は皆不安らしく彼の方へふり向く。)

フロスト

(彼の主人に。)職工達が參つてをります。

(アンソニーがれいふ身ぶりをする。)

連れて參りませうか？

アンソニー

待て！

(フロスト出て行く、アンソニー彼の息子の方へ顔を向ける。)

わしはわしに對して加へられた攻撃について一言しやう。

(エドガアは空敷を乞ふらしい神作をもつて、少し頭を下げてちつき動かすにゐる。)

一人の女が死んだ。わしは、その女の血がわしの手についてゐるといはれた、わしは亦外の女や子供の飢餓や困難も、わしの責任であると云はれた。

エドガア

わたしは『吾々の責任だ』と云つたのです。

アンソニー

同じことだ。(彼の聲は段々強くなつて行く、そして彼の感情は一層はつきりとなつて行く。) わしは若しわしの相手が、わしから挑んだのではない正々堂々の戦ひの爲に苦しむとしても、それがわしの罪だとは思はない。若しわしが彼の足下に倒れるならば——わしが倒れぬとは限らん——わしは決して泣きごとには云はん。それはわし自身が氣を付けねばならんことだ——そしてこれは——相手が氣を付けねばならんのだ。わしには、さうしろと云はれても、職工共と彼等の女房子供とを別にすることが出来ん。正々堂々の戦ひは正々堂々の戦ひだ！彼等は喧嘩を始める前に、先づ考へなくてはならんのだ！

エドガア

(低い聲で。) 然し實際正々堂々の戦ひでせうか、お父さん？彼等を御覽なさい、そして吾々を御覽なさい！彼等にはこの武器一つしかないのです！

アンソニー

(冷淡に。) 而かもお前達は彼等にその使ひ方を教へるほど腰が弱いのだ！人間が敵の加勢をするのが現代の流行と見える。わしはさういふ術を稽古しなかつた。彼等が組合と喧嘩したのも、わしの罪なのかな？

エドガア

慈悲といふものがありますからね。

アンソニー

然し正義が先きだ。

エドガア

或る人に對して正しく思はれることは、外の者に對しては不正なのです。

アンソニー

(激情を押へつけて。) お前はわしを不正だと云つて責めるのだな——どれだけの非道——残酷——

(エドガア戦慄の身ぶりをする——同びつくりする。)

ワンクリン

まあ、まあ、社長!

アンソニー

(冷酷な口調で。)これがわしの悴の云ひぐさなのだ。これはわしには分らない時代の言葉だ、柔らかな手合の言葉だ。

(一同眩く。烈しい努力をもつてアンソニーは自制を回復する。)

エドガア

(靜かに。)わたしは、自分に對してもさう云つたのです、お父さん。

(二人は暫らくの間ぢつと顔を見合はしてゐる、アンソニーは人身攻撃を一掃してしまはうとするかのやうな身振りで手を差し出す、それから手を額に當てる、目まひがするらしく身體を揺る。彼に近づかうとする仕草が起る。彼はそれを退ける。)

アンソニー

この修正案を會議に上す以前に、もう一言云つて置きたいことがある。(彼は顔から顔を見渡す。若

しそれが可決せられるならば、吾々自身が着手したことに於て失敗することとなるのである。吾々は吾々が有らゆる「資本」に對して負ふ處の義務に於て失敗することとなるのである。吾々は吾々自身に對する義務に於て失敗することとなるのである。吾々は絶えず攻撃を受け易くなり絶えずそれに屈服せざるを得ざることとなるのである。間違つた考を抱かないやうにせられるがいい——今敗北したら、決して二度と再び防ぐことは出来ない! 諸君は番犬のやうに自分自身の職工の鞭の前に逃げ出すに違ひない。若しそれが諸君の望む處の運命であるならば、諸君はこの修正案に對して賛成せられるがいい。

(彼は再び顔から顔を見渡して、最後に視線をエドガアに注ぐ。一同眼を床に伏せて着席してゐる。アンソニー仕草をする、ミテンチは議事録を彼に渡す。彼は朗讀する。)

『ワイルダア氏提出、ワンクリン氏賛成——「職工の要求を今朝シモン・ハアネス氏が指示せる提案によりて解決すべく彼に事件を一任すること」(不意に力を籠めて。) 賛成者は、何時もの方法によつて表明して下さい!』

(暫らくは誰も動かない、やがてアンソニーが口を開かうとする、急にワイルダアミランクリンミの手が舉がる續いてスカントルベリイ、最後に頭を垂れたままエドガアの手が舉がる。)

反対の方は？

(アンソニー自分の手を挙げる。)

(低い聲で。) 修正案は可決せられました。わしは本社社長の地位を辭職します。

(全き沈黙がある。アンソニーはちつき座つてゐる。彼の頭は徐々に垂れる。不意に彼は彼の全生涯が身中に湧き起つたかのやうに喘ぐ。)

五十年！諸君はわしに恥辱を與へられた。職工を連れて來い！

(彼はちつき座つたまま空を見詰めてゐる。重役連は慌てて寄り合つて一團となる。テンチがおどした調子で支關を話してゐる。ワイルダアはロンクリンを片隅へ連れて來る。)

ワイルダア

(急がしげに。)

何んと云つたものでせうね？ハアネスはどうして來ないのでせう？あの男の來るまでに職工に逢ふ必要があるでせうか？わたしはどうも——

テンチ

さあ這入つて下さい？

(トマス、クリイン、バルギン、ラウスが這入つて來て小さな卓の側を通り抜けて並ぶ。テンチ着席して書き

ものをする。すべての眼はアンソニーに注がれる。彼はちつきとしてゐる。)

ワンクリン

(小さな卓の處に進み出て、神経質な町重さで。) で、トマス、どういふことになつたかね？集會の結果はどうだね？

ラウス

シム・ハアネスが吾々の返答を存じてをります。あの人がその内容を申上げる筈です。吾々はあの人を待つてゐるのです。あの人吾々に代つてお話しする筈です。

ワンクリン

さうなのかね、トマス？

トマス

(不機嫌に。) さうです、ロバアツは來ますまい、かみさんが亡くなつたから。

スカントルベリイ

さう、さう！氣の毒な女だ！さうさう！

フロスト

(支關の方から這入つて来て。) ハアネス氏がいらつしやいました!

(ハアネスが這入るまゝ、彼は出て行く。)

(ハアネスは手に一枚の書類を持つてゐる、彼は重役連に會釋をし、職工達にはうなづく、そして室の中央に當る小さな卓の後方に位置を占める。)

ハアネス

今晚は、皆さん。

(テーチ今まで書いてゐた書類を持つて彼の處へ行き、二人は低い聲で話し合ふ。)

ワイルダア

吾々は君の來るのを待つてゐたのです。ハアネス君。何んとか一つ折れ合ひ——

フロスト

(支關の方から這入て来て。) ロバアツです。

(彼は出て行く。)

(ロバアツが急がしうに這入つて來る、そしてアンソニイを見詰めながら立つてゐる。彼の顔はやつれてふけてゐる。)

ロバアツ

アンソニイさん、私は少し遅刻したかも知れませんが、時間迄に來る筈でしたが、少々宅に取込みが——出來たものですから。(職工達に。) 何かもう云つたのか?

トマス

いいや! 然しおぬしは何しにやつて來たのだ?

ロバアツ

あなた方は今朝、歸つてもう一度吾々の立場を考へて見ると云はれたのでしたね。吾々はもう一度それを考へて見ました、で今その返答を申上げに參つたのです。(アンソニイに。) どうかロンドンへお歸り下さい。吾々はあなた方に用はありません。一厘一毛も吾々は要求を輕減しません、又この要求全部が容れられるまでは斷じて讓歩しません。

(アンソニイは彼の顔を見てゐるが、口を利かない。職工達は少なからず當惑したらしくざわつく。)

ハアネス

ロバアツ!

ロバアツ

(烈しく彼を眺めてから再びアンソニーに向ふ。) これならあなたにも充分明白ですか？ 簡単で而かも要領を得てはるませんか？ あなたは吾々が降服するに違ひないと誤解されたのです。あなたは肉體を破壊することは出来る、然し精神を破壊することは出来ない。ロンドンへお歸りなさい、職工はあなたに用は無いのです？

(不安らしく言葉を斷つて、一歩づつさしてゐるアンソニーの方へ進む。)

エドガア

吾々は皆君に同情してゐるよ、ロバアツ、然し——

ロバアツ

同情なんか止めて貰はう。お父さんに云つていただかう！

ハアネス

(一枚の書類を手に持つて、小さな卓の向ふ側から口を出す。) ロバアツ！

ロバアツ

(急にふり向いて。) 何んです？

ハアネス

(嚴肅に。) 君は事情を知らずに話してゐるのだ、事件は君の知らない間に進行したのだ。

(彼はテンチに合圖をする。テンチは重役達を招く。彼等は急いで契約書の寫しに署名する。)

これを見給へ！

(手に持つてゐる書類を示しながら。)

「要求を承認す、但し技手及び火夫に關するものを除く。土曜日の時間外勤務は賃銀二倍増しとす。夜勤は現在と同様とす。」この條件で折れ合つたのだ。職工は明日から復業することになつてゐる。ストライキは終結したのだ。

ロバアツ

(書類を読みながら、職工達の方へ顔を回ける。彼等は尻込みする。ラウスのみは持ちこたへてゐる。死のき靜肅をもつて。) 君達は俺を賣つたな、俺は死を暗して君達の味方をした、君達は俺を見棄てる時機を覗つてゐるのだ！

(職工達は答へる、皆が一時に話す。)

ラウス

それは嘘だ！

トマス

おぬしには我慢が出来なかつたのだ。

グリーン

君が俺の云ふことを聞いてゐたら――

バルギン

(小聲で。) だまれ!

ロバアツ

君達はそれを覗つてゐるのだ!

ハアネス

(重役達の契約書の寫しを取り、自分のをテンチに渡しながら。) もういい、諸君。歸り給へ。

(職工達は如何にも手持ち無沙汰らしくゆる／＼と出て行く。)

ワイルダア

(低い神経質な聲で。) もう此處にゐる用はないやですね。(彼は扉の方へ行く。) 汽車に間に合うか
一つやつて見やう! 行きませんか、スカントルベリイさん?

スカントルベリイ

(ランクリンと共にいて行かうさしながら。) 参りませう、参りませう、一寸待つて下さい。

(ロバアツが話し出したので立ち止る。)

ロバアツ

(アンソニーに。) が、あなたはあの契約書に署名なさいませんか! 社長の署名無しに契約は出来
ない! あなたは決してあの契約書には署名せられはすまい!

(アンソニー黙つて彼を見てゐる。)

お願いですから署名した! と云はないで下さい! (熱烈な歎願をもつて。) 私はあなたを信頼したのだ

ハアネス

(重役達の契約書の寫しを示しながら。) 重役達は署名したのだ!

(ロバアツは氣の無い様子で署名を眺める――その書類を突きつけて、自分の眼を掩ふ。)

スカントルベリイ

(後方でテンチと握手しながら。) 社長に氣を付けて上げなさい! 社長はよくないよ、社長はよくないよ――お晝を上らなかつた。若し女子供の爲に義捐金を募集するやうだつたら、わたしの名で――

—二十磅出して下さい。

(彼はそそくさま慌てふためいて、玄関の方へ出て行く。顔を引つ釣らせてロバアツとアンソニーとを見詰めてゐたワンクリンが、それに續く。エドガアは長椅子に着席したまま床を見てゐる、テンチは書きもの机の處へ戻つて議事録にもものを書く、ハアネスは小さな卓の傍に立つて、嚴肅にロバアツを眺めてゐる。)

ロバアツ

ぢやあ、あなたはもうこの會社の社長ではないのですね！(氣違ひじみた笑ひを發して) ああ、はあ——ああ、はあ、はあ！ 奴等はあなたをほり出したんですね——社長をほり出したんだ。ああ——はあ——はあ！(不意に物凄く冷靜をもつて) そこで——奴等は吾々二人共やつ付けてしまつたのですね、アンソニーさん？

(エニツドが急いで二重扉から這入つて来て、彼女の父に近付き寄り添ふ。)

ハアネス

(寄つてロバアツの腕に手をかける。) 恥を知れ、ロバアツ！おとなしく内へ歸れ、内へ歸れ！

ロバアツ

(彼の腕を引き放しながら。) 内？(だちろぎながら——啞く。) 内？

エニツド

(靜かに彼女の父に。) いらつしやいな、お父さん！あなたのお部屋へいらつしやいな！

(アンソニー努力して立ち上る。彼は彼を見てゐるロバアツの方へ眼を向ける。二人はぢつと眼を見合はしたまま數秒間立つてゐる、アンソニーは會釋せんとするが如く彼の手を擧げかける、がそれを却してしまふ。ロバアツの顔の表情は敵意から驚嘆にかはる。二人は敬意の印に頭を下げる。アンソニーは向きかはつて、ゆるゆると帷のあゝ扉の方へ歩いて行く。不意に彼はよろけて倒れやうとする、が持ちこたへる、そして急いで駆け寄つたエニツドとエドガアに助けられながら出て行く。ロバアツはぢつと突つ立つたまま、數秒間アンソニーの後を見送つてゐたが、やがて玄関の方へ出て行く。)

テンチ

(ハアネスに近付きながら。) これでやつと安堵しましたよ、ハアネスさん！が實に痛々しい光景でしたね！

(彼は額を拭く。)

(ハアネスは青い顔をして快然たる態度で、苦い薄笑ひで、びくびくしてゐるテンチを眺める。)

何もかも充分亂暴でしたからね！『二人共やつ付けてしまつたのですね！』と云つたのは一體どういふ積りでせう。おかみさんが無くなつたといふのなら、社長に對してあんな口をきくべきではありませんね！

ハアネス

女が一人死んで、最も立派な人が二人倒れたのだ！

(アンダアウッドが不意に這入て来る。)

テンチ

(ハアネスを見詰めながち——突然昂奮して。) 御存知でせうか、あなたは——この條件と云ふのはあなたと私が二人で作成して、争ひの始まる前に雙方へ提出したものと全く同一ぢやありませんか？こんなことや——こんなことや——それは——一體何んの爲だつたのです？

ハアネス

(ゆるやかな苦い聲で。) そこが可笑しい處なのさ！

(アンダアウッドは向ふ向いたまま扉の處で同意の仕草をする。)

幕が下りる。

大正九年七月五日印刷
大正九年七月十三日發行

【定價金壹圓四拾錢】

譯者 和氣律次郎

發行者 足助素一
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

發行所 叢文閣
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

印刷所 川崎活版所
東京市京橋區築地二丁目三十番地

(印刷者) 川崎佐吉



同じ譯者によりて

奈落の人々

オスカア・ワイルド

エピキュラスの園

畫僧フラ・アンヂエリコ

マグダラのマリア

七つの燈火

叢文閣

春陽堂

天佑社

立文社

立文社

梅津書店

390
26

102

23

終

